ワークショップ
社会的判断：測定の問題と現象論

道徳的判断の測定とその問題

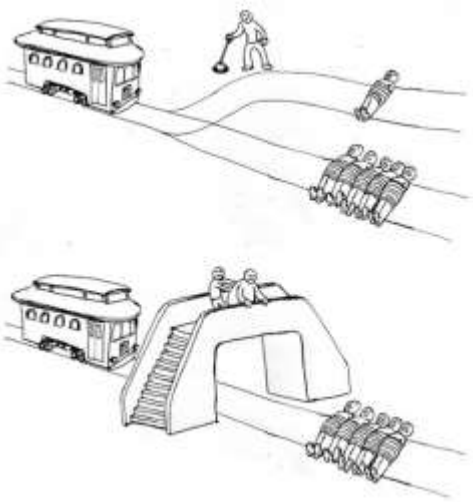
過程分離手続きを用いて

東京大学人文社会系研究科
唐沢かおり

第61回日本GD学会　2014年9月6日　東洋大学

本発表に関する研究は、橋本剛明（東京大学）との共同によるものです

古典的事例



- 5人を助けるために･･･
- トロッコの進路を切り替えて一人を殺すかどうか？
- 橋の上から一人を突き落とすかどうか？

二つの道徳的判断

- 義務論 (deontology)
  - 普遍的・究極的な道徳規則に従う
  - その行動が道徳的に認められるものであるかどうかが問題
- 功利主義 (utilitarianism)
  - もたらされる結果の効用により決まる
  - その行動が望ましい結果をもたらすかどうかが問題

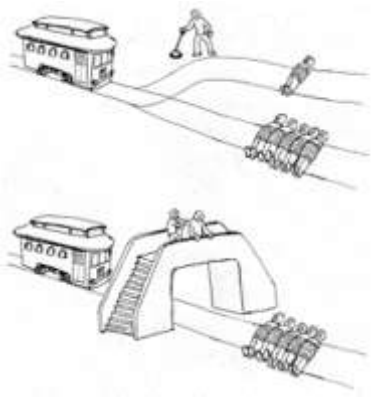
方法論的問題

- 参加者はポイント切り替えを行うのか行わないのかを判断
  - 切り替えない→義務論的判断
  - 切り替える→功利主義的判断

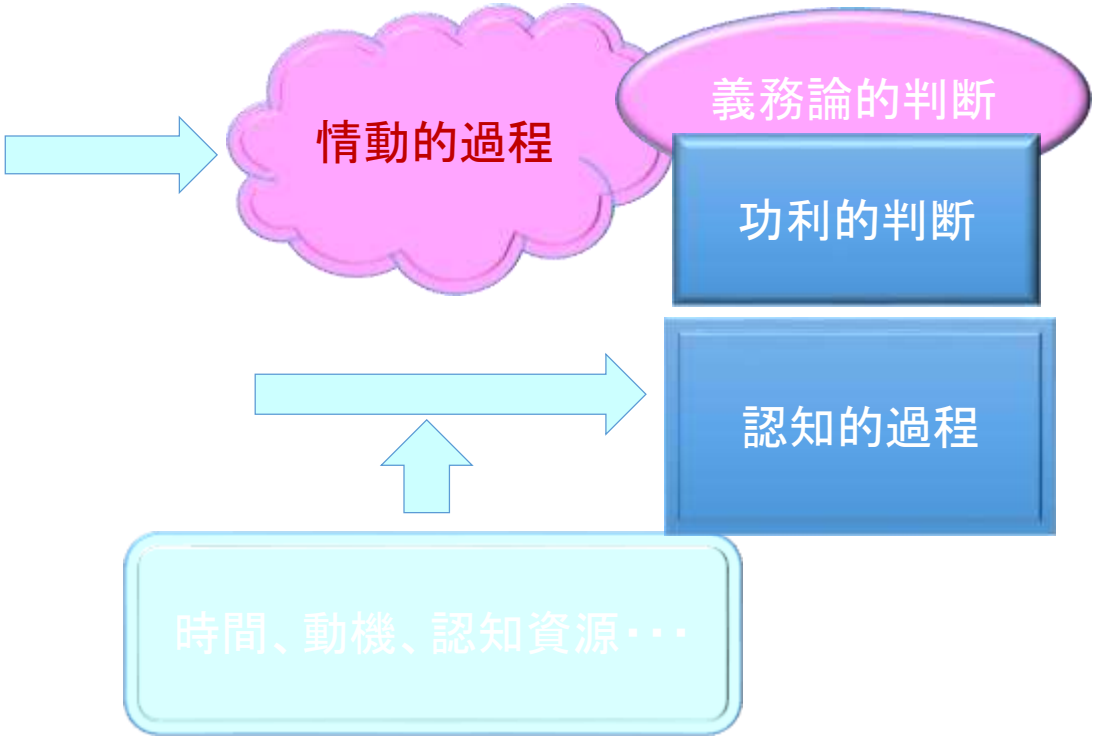
- 一方に賛同＝もう一方を否定
- 両者はひとつの軸の両端なのか？
- 両者は質的に異なる二過程なのでは？

Greeneの二過程モデル

- 道徳的な判断は情動的過程と認知的過程の二過程からなる



道徳的刺激



二過程性の証拠

- 脳機能との関係から
  - 個人的道徳的判断、義務論的判断は情動関連部位、功利主義的判断は認知判断関連部位が活性、VMPC損傷患者は功利主義的反応（Greene et al., 2001, 2004, Koenigs，et al., 2007）

- 感情反応喚起から
  - 危害の描写や優しさ喚起で義務論的判断、ユーモア喚起で功利主義的判断(（Bartels, 2008; Petrinovich & O’Neill, 1996, strohminger et al., 2011)

- 認知資源の操作、個人差から
  - 時間制限や認知負荷により義務論的判断、熟慮的思考傾向により功利主義的判断（Bartels, 2008,　Greene et al., 2008,　Paxton et al., 2011,　Suter & Hertwig, 2011 ）

新たな測定方法の必要

- 従来の測定
  - 義務論　vs. 功利主義
    - 単一次元の両極という概念化でよいのか？

- 二過程モデルは2つの独立した過程を想定
  - 各過程と連合する要因の検討のためには個人内の2つの傾向の強さを独立に定量化する必要
    ⇒ 過程分離手続き（process-dissociation procedure）
    （Conway & Gawronski , 2013）

過程分離手続き

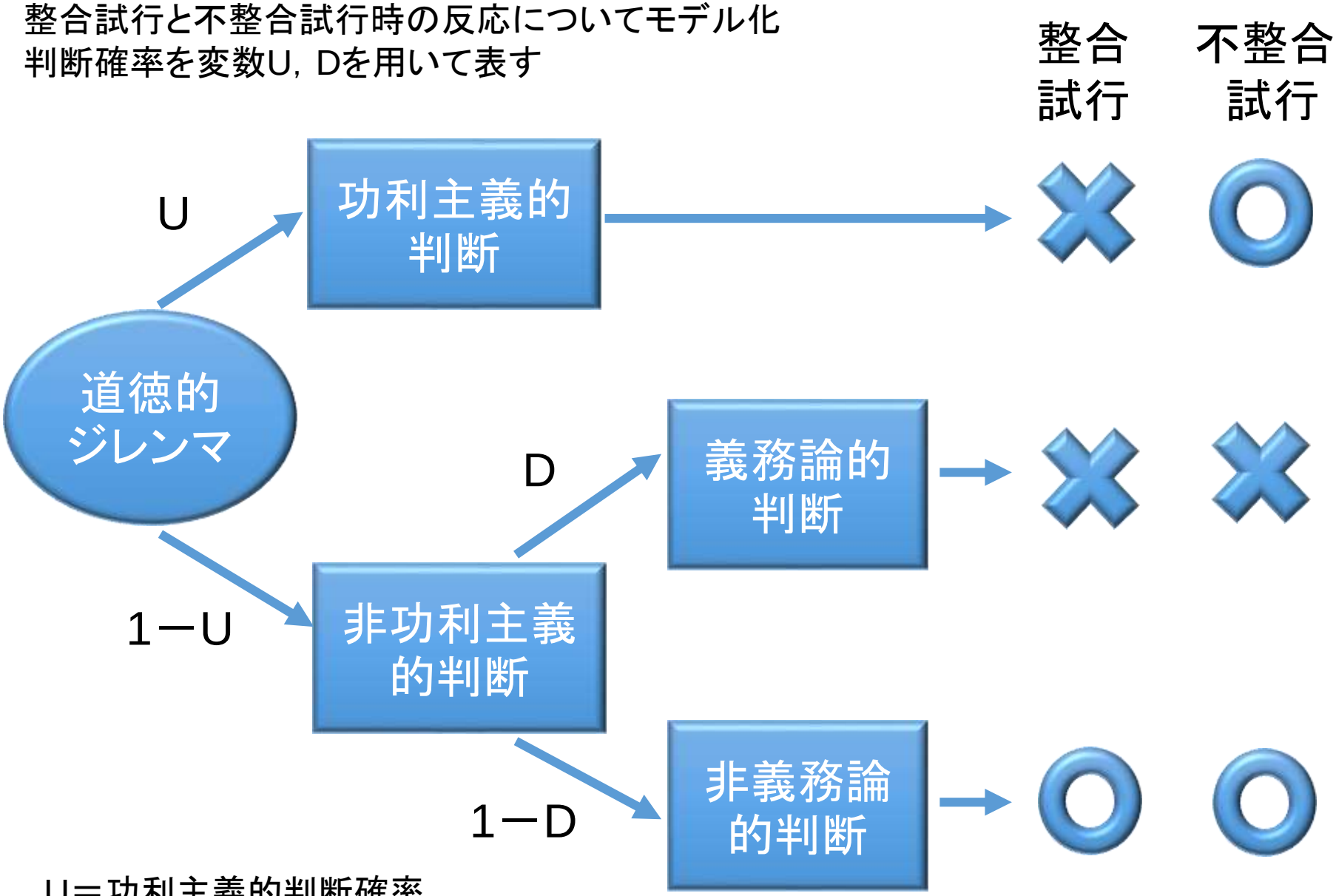
- Jacoby (1991) の過程分離（PD)手続き

  プロセスが競合するとき(不整合条件)の反応と、一致するとき(整合条件）の反応を比較し、各プロセスの相対的な影響を数量化する

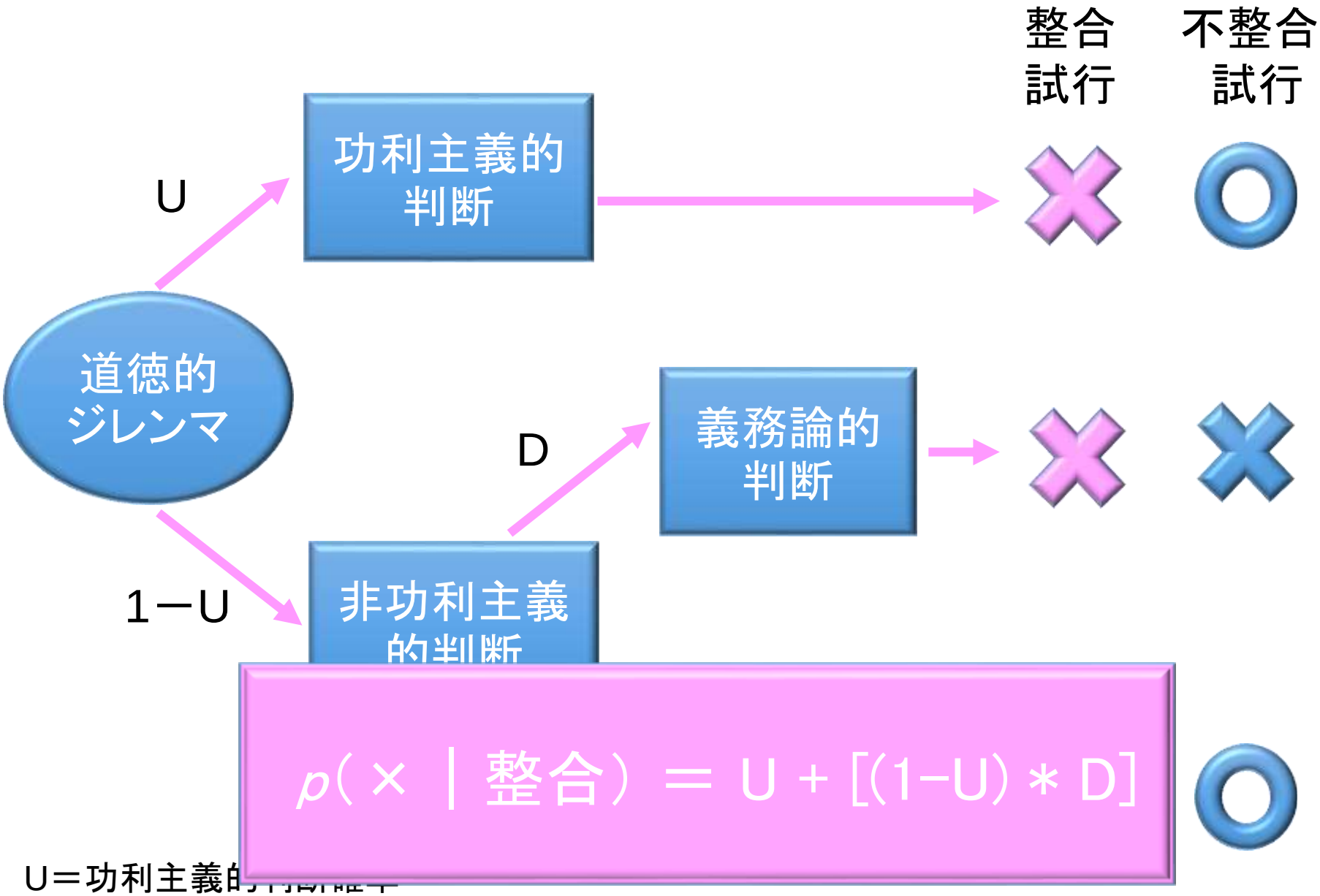
道徳判断場面での例：

	義務論	功利主義	
ペイント弾の爆発を防ぐために テロリストを拷問にかける	×	×	**整合条件**
殺傷力のある爆弾の爆発を防ぐために テロリストを拷問にかける	×	○	**不整合条件**

整合試行と不整合試行時の反応についてモデル化
判断確率を変数U，Dを用いて表す



U＝功利主義的判断確率
D＝義務論的判断確率



U＝功利主義的判断確率
D＝義務論的判断確率

過程分離の方法

p(×｜整合) ＝ U + [(1−U) ＊ D]
p(○｜整合) ＝ (1−U) ＊ (1−D)
p(×｜不整合) ＝ (1−U) ＊ D
p(○｜不整合) ＝ U + [(1−U) ＊ (1−D)]

U = p(×｜整合) − p(×｜不整合)
D = p(×｜不整合)／(1−U)

Hashimoto & Karasawa (2014)

- 過程分離手続きを用いて、義務論的・功利主義的判断に連合する要因を確認・同定

- 一般的勢力感
  - 高勢力者は勢力維持のため安定を志向しrule-basedな義務論的判断を好むが低勢力者は結果重視の功利的判断を好む(Lammers & Staple, 2009)
- 公正世界信念（BJW：一般次元と個人次元）
  - 信念が高いほど不合理・不公平に怒りを感じにくい（Dalbert, 2002; 中島・吉田, 2009)→結果がフェアであることを信じ、かつ望む→功利主義的判断？

方法

- 参加者 : 大学生122名
- 道徳シナリオ　８組16個
  - Conwayら（2013)の道徳ジレンマシナリオ（類似場面で整合／不整合条件のシナリオをペアで作成）
    - ペイント弾爆発　vs. 核爆発
- 公正世界信念　13項目(Dalbert, 1999)
- 一般勢力感　8項目(Anderson & Galinsky, 2006)
- 日本語版PANAS　６項目
- 主観的幸福感　３項目

結果：各変数の相関関係

	道徳判断傾向（一次元）	義務論傾向（D）	功利主義傾向（U）
義務論的判断傾向（D）	.87**		
功利主義的傾向（U）	-.55***	-.15	
公正世界信念（一般）	.11	.14	.09
公正世界信念（個人）	-.07	.03	.29**
一般勢力感	.17†	.18*	.01
PANAS	.20*	.17†	-.11
主観的幸福感	.15	.20*	.00

結果のまとめ

- BJW個人次元のみ、U得点とのみ正相関
  - 自分自身が「個人として」公平に扱われているという信念を持つほど、規範や原理原則に頼ることなく、結果に基づく判断で成り立つ世界をよしとする？（成果主義であり非平等主義？）
- 一般勢力感は、D得点とみ正相関
  - 勢力感の低さが結果重視を招くのではなく、高い人ほど現状維持につながる規範的判断を重んじる？
- D得点とPANASおよび主観的幸福感が正相関
  - ポジティブムード → 直感的判断？
  - 幸福な状態を維持するため、義務論的判断を行う？

重要なこと

- 測定対象（道徳的判断）の概念化と測定手法が密接に結びついている←当たり前

- 概念化問題・・・義務論と功利主義とは
  - 判断が従う原理　vs.心的過程（情動的過程や認知過程）が生み出す判断結果→異なる問い
  - 対立する「原理」→どちらを判断に採用するのか
  - 心的過程→いかに判断にいたるのか